

ただ、では、偏ってはいけないから私たちは声を上げてはいけないのかということ、それは全くの間違いで、なぜかということ、私たちは生まれた時点で既に偏っているわけですよ。性別だって、どれかを選ぶというか、どれかとして生まれざるを得ないですし、国籍にしる、出自にせよ、出身地域にせよ、何か決まっていますよ、それによって、当然、その地域の高等教育の割合であるとか、親世代の平均収入ですとか、そういうものによって、獲得できるルートは偏らざるを得ないわけですから、そういう賃金格差ですとか機会の格差を考えたときに、私たちは偏りたくない気持ちは分かるが、偏っていったり当たり前で、かつ、政治を通じて自分たちの利害を追求することというのは、偏っているけれども、必要なのだ。なぜなら社会が偏っているからというふうで考える方が、個人的には社会運動も、社会復帰というか、こういう自己責任で縛られた人たちが、より楽になるのではないかという言い方はできるのかなと考えています。

すみません、評価と私の意見が少しごっちゃになっている部分があるのですが、取りあえず日本の若年層として、あるいは日本人全体として、まず、社会運動に対するネガティブなイメージであるとか、あるいは、特に、特定の取材に対する忌避感が高いであるとか、偏っている、迷惑をかけている、過激なものだという評価が、特に若年層ほどあり得るし、その背景には自己責任意識であるとか、中立志向みたいなものが強くあるというのが1つ、ここまでのまとめなわけですが、では、何で今の時代になって、社会運動がこんなに遠くなってしまったのか、なぜ若い人々は職場ないし学校のようなところで、声を上げづらいし、あまつさえそれが迷惑、自己中、わがままと評価さ

れるようになってしまったのかということについて、少し一緒に考えていきたいと思えます。

1つ目には、90年代以降、グローバル化はずっと中世とか近代社会からずっとあるだろうという言われ方をしてしまうと思うのですが、社会のグローバル化によって、個人化というのが非常に強くなった。例えば、私は立命館大学というところで教えていますが、30人ぐらいのゼミ教室みたいなのところがあって、自分と隣のやつが、何か同じ共通の要素を持っている人と思っている人は極めて少ないと思います。

つまり、出自がそれだけ違う人たち、例えばその中には、海外ルーツの人もいれば、性的・民族的にマイノリティーという人もいるし、あるいは学費を親に全て出してもらっているという人もいれば、自分で何とかやっているという人もいます。それぐらい、もちろん社会というのは常に多様化しているわけですが、多様化しているし、かつ、自分たちは多様で、それぞれ全然違う状況にあるということを物すごく内面化せざるを得ない社会状況というのがあるわけです。

これは学校だけではなくて、大学、高校だけではなくて、恐らく皆さんの職場でも同じだと思います。それこそ新卒で入られた方もいれば、第二新卒で入られた方もおり、パートタイムの方もいれば、正社員でも自宅勤務であったり、介護ですとか育児ですとかケアを抱えていらっしゃる方もいます。そういうような、立場が違う人というのが明確に増えてきているし、そういう人に、ある種多様化というものが非常に規範として強くなっているのだから、そういう人たち、人々の個別性を尊重しようという規範が物凄く強いわけですから、そう考えると、もうみんながみんな、職場としての一体感ですとか、

連帯ですとか、そういう規範からはどうしても遠くなってしまいうわけですね。みんな違って、みんないいみたいな精神がある種、私たちの連帯を狭めているとか、妨げているみたいな状況があって、それを出自レベルで、生い立ちレベルで認知せざるを得ないというのが、やっぱりすごく若年層とか若年労働者をめぐる状況としてあるわけです。

そうなると、たとえ困っていて、学費が高いとか賃金が安いとかと声を上げようとしたとしても、例えば、困っているのは自分だけかなとか、もしかしたら私はこのままで大丈夫だからとか言われちゃうかなとか、そういうことがある。そういう懸念が、まず生まれてくる。

もう一つは、社会運動に対してよく出てくる批判ワードとして、価値観の押しつけでしょうという言い方が、特にここ10年ぐらい強くなってきたわけです。

つまり、みんな違って、みんないいのだから、自分の価値観を主張するということは、他人に対して価値観の押しつけになるのではないかという懸念ですよ。そういうものをすごく含んでいるのではないかと思います。だからこそ、先ほど言ったような、主張ってわがままでしょう、わがままかもしれない、主張したとしても迷惑かもしれないという形で、さらに、自分の不満とか不平とか、あるいは批判みたいなものも、中に押し込めて、自分の努力でしか解決できなくなってしまうというところですよ。

私、結構いろいろな大学であるとか、若い当事者の方の前で講演をするときに、これって自分だけという悩み事を教えてほしい、こっそり教えてほしいみたいな言い方で、匿名で意見を募ったりするのですが、それは高校とか大学に限らず、若い労働者の方の集まりなんかに行っても、すごくあるのが、お金がないのって、

自分だけだと思っちゃうみたいな言い方なんですよ。つまり、貧困って結構いろいろな人が感じていて、声を上げて、だから、反貧困運動とか労働運動は成立していると思うのですが、ただ、今の若年層は、それが自分だけだと思ってしまうというのが、私にはすごく興味深いことでした。

例えば、これは大学での講演での意見ですが、左の人なんか、Z o o m授業が始まって、みんなの部屋の様子とかが分かるのだけど、自分だけが非常に古臭いアパートに住んでいて、みんなはすごくいい部屋に住んでいるように見えます。モニターつきのベルとか、人が来たときに、ピンポンしたときに、モニターがついている部屋にみんな住んでいるのだけど、自分だけ住んでないみたいな、すごくディテールをイメージした答えをくれたりしたのですが。

あるいは、例えばゼミとかで合宿をしたりとか、高校で修学旅行とかをするときに、お小遣いの額が全然違うみたいなものに対して、これって自分だけじゃないかって思ってしまうという人もいらっしゃいました。

あるいは、これなんかは結構いろいろな職場とか学校、大学、高校で聞いたりするのですが、みんながすごくお金持ちそうに見えると。旅行の話とかばんばんしてきて、自分は場違いに感じるという意見もすごく聞いたりするわけです。

これはすごく似通った話というか、大体1つの会場が100人いたら、10人ぐらいそういう回答をくれるんですよ。つまり、1割いれば、全然私だけではないわけけれども、それでも私だけと感じてしまう。つまり、俺、今金ないんだよねとか、私ちょっと、そんなに親に仕送りもらってないからとか、そういったことが言いづらい、それって私だけと感じ

てしまうぐらい、自分の、よくある悩みというのを誰にも対面の相手に吐露できないという状況があるのかなと。

つまり、すみません、繰り返しになってしまうのですが、本当は、多分多くの人は昔と同じようなことに悩むと思うんです。例えば、賃金が安いであるとか、パワハラを受けていますとか、家がどうか、すごく貧乏ですとか、そういうことなのですが、悩みの表れ方が個人化しているし、出自が全然違って、労働の状況も、学習の状況も違うからこそ、これって自分だけなんじゃないのと思ってしまう。

だから、悩みそのものが物凄く個人化していて、しかもそれを自助努力で解決しなければいけないという規範が強いから、その根本にあるような、貧困であるとか、労働の苦境であるとか、そういうものを誰とも共有できずにいるのではないかというのが、すごく今状況としてあるのではないかと解釈できます。

もう一つとして、すみません、少し長くなってしまいますので、さらっとですが、例えば、高校ではあまり出てこないものとして、100人中10人ぐらいは自分の貧困について、誰にも言えないと言っていたが、あと10人ぐらいがよく出してくる答えとして、やっぱり労働に対する悩みというのも結構あるわけです。パートタイムとかアルバイト、かなりあるわけです。例えば、バイト先の店長がむかつくとか、社員が時間外労働を要求してくるとか、その時間内でできるわけない仕事ばかり押しつけてくるとか。ただ、ここですごく興味深いのは、より頑張ってみ返そうと思うとか、取りあえず愚痴を言っているとか、やめたとか、やっぱり集合的に問題を解決するということが、どうしても作法として出てこないわけです。

つまり、悩みというのが個人化されている以上、他人とせいぜい愚痴を言い合うレベルでしか共有できない。だからこそ、解決策は個人的な方法になりがちだし、自分でバイト先の店長を、頑張ってみ返すとか、辞めるみたいなきっかけになってしまうというところなんです。かつ、他者と共有できたとしても、集合的な問題解決、何せ先ほど申し上げたとおり、社会運動というのは、迷惑で、わがままで、自己中だという評価が根づいてしまっているわけですから、そういう中で声を上げるというのは極めて難しい。だからこそ、愚痴にとどまってしまうというところがあるのではないかとこのところなんです。

では、何でこんなに個人化されてしまった彼らは、集合を嫌うのか、組織化し何か問題を解決したり、助け合ったりするということ、これほどまでに苦手になってしまったのかということを考えなければいけないなというところで、1つは、地縁血縁みたいなものの集団、あるいは中間集団の衰退というところかなと思います。

1つは、この30年40年で、やっぱり地元を離れる若年層というのがかなり増加したわけです。かつ、増加したまま都市に行って、個人として労働者になってしまうわけですから、そうなる、例えば投票のときに、地域の人が投票しているから、それをまねして、自分もこの人に投票しようとか、今もあるかもしれないですが、親や家族がこの人に入れるから自分も入れてみたみたいな、そういった政治的判断とか社会的判断の住居集団というのですか、難しい言葉で言うと、そういうものがなくなってしまったというのが1つあり得るかと思います。

もう一つとしては、自治会、町内会というのが、いわゆる地域にあるような、商工団とかもそうかもしれませんが、中

間集団というのが衰退して、皆様御存じのとおりだと思いますが、組合組織率というの、大幅にというか、徐々にというか、低下傾向には基本的にあると。

そうすると、何がなくなっていくかという、自治ですとか、共助みたいな理念です。そういったものが根つきづらくて、その分、自助に依拠しなければならなくなる。例えば、自治会にしても、組合にしても、基本的には情けは人の為ならずみたいな集団なわけです。つまり、自分が困って、それに対して助けてもらった、次は誰かの困り事を助ければいいという規範の下で成り立っているわけですが、雇用がこれだけ流動化してしまったり、集団というものに根づく、所属し続けるという概念がないと、助けられたら助けられっ放し、助けたら助けっ放しということで、互助とか共助みたいなものに変えるだけの時間を生きてない、長期的な時間というのを、どうしても生きられない社会なわけです。そういうよ

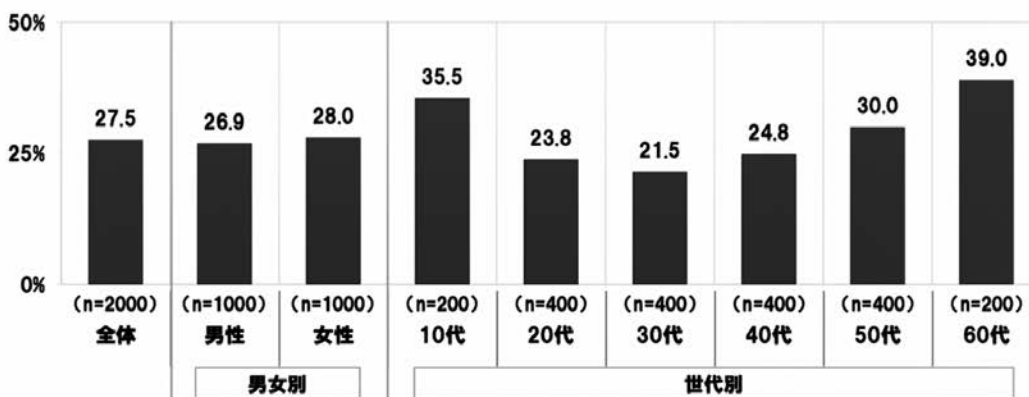
うな状況というのが、特に若年層の中であるし、何なら、悩み、苦しみというのを声にする場が、恐らく匿名のSNSぐらいしかないというか、悩みとか苦しみを抱えていても、これって私だけと感じてしまったり、それを共有したり助け合う場がなかなかないというのが、恐らく中間集団の衰退とか流動性の上昇と関わってくるのではないかと思います。

さらに、直接的に言うと、まず、社会運動とか労働組合運動というのを目にする機会がなかなかないわけです。つまり、大学や地域の自治会というものとか、町内会がないということになると、そもそも助け合うとか自治をするという概念みたいなもの、さまというのを目にするところがないわけです。

例えば、大学の学費であるとか、あるいはインフラ、就労とかの問題にしても、声を上げるのは専ら自治会みたいなところだったりするし、あるいは高校の生徒会なんかはもっとポピュラーかもしれま

連合2021年調査「#多様な社会運動」

社会運動に参加したことがある割合



連合実施「多様な社会運動と労働組合に関する意識調査」(2021年3月,全国の15歳-64歳2,000名,女性1,000名/男性1,000名に対するインターネット経由・リサーチパネル調査)

せんが、そういうところが活躍していたり、活発だったりするさまというのを、まるで見たことがないと、例えば食堂の値段が上がったとか、学費下がらないかなと思って、そもそも声を上げる機会みたいなものとして認められないわけですから、そうすると不満は自分の中に行かざるを得なくなる。

もう一つとして、70年代以降、デモの発生率というのも基本的に下がっています。下がっていますし、運動団体がやっている学習会みたいなものも、基本的にはあまり多くはなってないですよ。社会運動の従事者層というのがどんどん減ってきているので当たり前ですが。

そう考えると、社会運動を目にする機会がない。たまに見たとしても、例えば海外のニュース、グレタ・トゥンベリさんが、これだけ声を上げたであるとか、ウクライナの侵攻に対して、世界中に声を上げているとか、海外の運動ばかりだったりするわけです。そう考えると、自分も声を上げていいんだと感じる機会がまずない。それを踏まえると、なかなか、不満があっても、あるいは政治的に言いたいことがあっても、自分の身近にづらいことがあっても、声を上げることがそもそもできない。

では、そういうときに我々が、そういう政治に対して声を奪われて、自助努力でしか生きていけない若年層とどうやっていくかということ、生活の場から細々とも政治参加とか社会運動の練習をしていくということが重要なのかと思います。

すみません、少し提言チックになってしまったので、またデータに引き戻したいと思うのですが、では、若年層は、今どういう社会運動を望んでいるか、どういう政治意識の発露であったり発言であれば、好ましく感じるかというところで、今、連合が非常に若年層に集中している

いろな調査をやっていて、自分も調査に関わっていたりするわけですが、見てみると、結構面白くて、社会運動への参加意欲も参加割合も、実は20代30代、30代は私の世代ですが、ボトムで10代になって上がってきているんです。

これなぜかということ、例えばSDGsみたいな概念の広がりもあると思うのですが、これなんかを見てみると、60代と10代が同じような割合で、本当かと思ったりするのですが、これは少しからくりがあるんです。突然10代でいきなりデモの場に行き出したみたいなニュースは、皆さんも見えてないし、私も見てないので、これは少しからくりがあって、この調査では、社会運動というのを、かなり広く定義しているんです。

つまり、昔ながらのデモとか署名とかボイコットみたいなものから、クラウドファンディングであるとか、いわゆるハッシュタグ・アクティビズムのツイッターデモみたいなものであるとか、寄附行為みたいなものも全部含んでいまして、50代60代では、デモ、署名、金品支援の参加率が高いのです。デモなんかは意外と、路上に出てやるのが、よくある昔ながらの社会運動です。

それに対して、10代20代というのは、金品支援であるとか、あるいはツイッターでハッシュタグをつけるみたいな、インスタでハッシュタグつけるみたいな、そういった参加率が高くなるから、これだけ参加率が高く、結果として参加率が高く見えるというのか、なるということです。

これは20代も同じ傾向で、つまり、若者が社会運動に参加しないかということ、全然そんなことはないです。ただ、そのタイプが大分違っていているというのが、この講演の最後で言いたいことで、例えば署名、特にこれウェブ署名ですが、とか金品支援、ハッシュタグ、これはクラウド

ドファンドですが、とかハッシュタグ・アクティビズム、ツイッターデモであるとか、1人でできる静かな運動です。組織が嫌いで、集団も嫌いな彼らというのは、1人でできる静かな運動というものに、だんだん心引かれていっている傾向があるのではないかというのが連合のデータです。

さらに見ていくと、これは若年層に集中して、10代20代狙い撃ちで、連合がやっている調査で、これはネットでPDFで見れますので、Z世代が考える社会をよくするための社会運動調査とググったら出てくるのですが、どのような形式の運動であれば参加できるかということを見てみると、これ、1位が顔や名前を出さずに参加できる。2位が気軽に参加できる。3位が参加したいときだけ参加すればいい、4位がネット上で完結できるということなので、とにかく静かで顔も名前も出したくなくて、持続的に参加したくないというところなんです。

ですから、やっぱりやりたくない、社会運動やりたいのだけど、どうしても最後の一步参加できないという人の聞き取りなどをしていっていると、やっぱり就活に響くから顔割れしたくないとか、友達や家族にバレたくないみたいな、顔割れしたくない、したいときに参加したい、しがらみみたいなものが運動でつくられそうで、それが怖いみたいなことがすごくあるわけです。

連合の同調査によると、どういう運動に参加したいか、もう一つの調査票があって、それを見ていみると、成果、課題が分かりやすいといいとか、友達が、でも、友達ができるといいは、10年前より大分減っているの、やっぱり成果への志向みたいなものが、すごく強いんですね。

ですから、労働組合運動というものを、彼らとフィットさせる運動として、彼らとマッチングがいいものかどうかというのは非常に難しく、例えば、組織性がすごく労働組合運動は強いわけです。そ

連合2022若年層運動参加調査

どのような形式の運動であれば参加できるか



連合実施「Z世代が考える社会を良くするための社会運動調査」(2022年3月、全国の15歳-29歳1,500名、女性750名/男性750名に対するインターネット経由・リサーチパネル調査)

ういう意味ではネガティブに働くかもしれませんが、ただ、成果とか課題というのは非常に分かりやすいわけです。どれぐらい、何でしょう、例えばジェンダー平等の運動とかをやっている、確かに、森元首相をオリンピックの委員会から辞めさせたであるとか、こういう発言、こういう広告というのが駅から取り下げられたみたいな効果はあるのかもしれませんが、ただ、それでジェンダー平等とか多様性みたいなものへの意識がどれぐらい上がったか分かりませんが、労働組合運動はもう少し課題が明確で、かつ、成果も分かりやすいというところがあると思うんですよ。

そういう意味で、実は若年層の要求する運動と相性がいいのではないかとこの考え方はできると思います。

一応、労働組合の1つの組織として、応援するということで、一緒に考えていければと思ったのが、労働運動とか社会運動は、これからどうすればいいのかということです。これも連合のイベントで、若者とともに進める参加型運動というようなイベントで、若い参加者の方が、この人たちも労組に関わっているわけですが、いろいろな意見を言ってくれて、少し読んでみますと、時間がないのですが、怖いとか面倒くさいとか大変とか堅苦しいとか、あるいは何か宗教みたいな言い方であるとか、いろいろなネガティブなイメージが出てくるわけです。

ただ、やっぱりそれだけではなくて、労働組合運動は、すごく生活のレベルから困っている声を上げられるという意味で、すごく彼らを救う1つの媒体になると思うんですよ。例えば、彼らは、これも連合の調査だったと思いますが、長時間労働に対する問題意識とか、貧困に対する問題意識とか、実際生活苦しい人が多いですから、すごく強い。ただ、それっ

て、その中に、救われない人に自分が入ってないんですよ。

つまり、俺も確かに長時間労働しているけど、過労死レベルじゃないからいいかとか、確かに月15万とか20万で暮らすのは厳しいけど、でも生活保護をもらうほどじゃないから黙っていようとか。ただ、そうやって自分たちの要求を過小に、過小に捉えて、頑張るで解決していくと、どんどん自分の困り事が小さく矮小化されてしまって、意見が言えなくなっていく。だからこそ、多分若年層がそうやって自己を過小化してしまう、自意識過剰という言葉がすごく、原田さんの講演で近いかと思ったのですが、その過剰化された自意識を、どこかで外にあげるために、労働運動は役に立つのではないかとこのことは、1つ言えるかと思いません。

ですから、ちょっとしたことから声を上げていくという支えに、労働組合運動が若い人に対してなれば、すごく、若い人の抱えているある種の社会問題性というのも解決できるし、労働組合運動も、すごく社会に対してもともとある意義を提示できるのではないかという言い方ができるのではないかと思います。

すみません、少し長くなってしまったので、若年層ということに集中して言うと、ここまでですが、ぜひ、若年層の力を借りて、労働運動をアップデートして活発化できるといいのではないかと思います。

これで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

対談「これからどうなるの？若者は何を求めて動くのか」

マーケティングアナリスト 原田 曜平氏
立命館大学准教授 富永 京子氏
司会 田中美貴子氏
(自治労群馬県本部書記次長)

【司会】 富永様、原田様、どうぞよろしくお願ひします。

【富永】 よろしくお願ひします。

【司会】 ありがとうございます。

後半のセッションでは、「これからどうなるの？ 若者は何を求めて動くのか」をメインテーマとして、若者をよく知ってお二人のスペシャリストにより、若者がより一層社会活動などに参画できるように、私たちに何ができるのか、そのヒントをいただければと思います。



どう接したら
よいのか？

それでは、初めに、社会や組織内において、若者の考えが分からず、コミュニケーションや接し方など、苦勞している中高年は多い現状があります。まず若者を知ることが重要になってくると思います。

そこで、取材経験が豊富なお二人に、まず、こちらのテーマ、若者を知る上で、または、接する際に気をつけている点、

意識している点は何でしょうか。

富永様、お願ひします。

【富永】 先ほど申し上げたとおり、やっぱりすごく、ちょっと面白かったものがあって、この間、うちの学生が就活を始めまして、メールで「社員様」と書いてあるんですよ。就職活動してて、社員様とお話しする予定があるのでゼミ休みますと言って、一労働者に対して社員様かよと思っちゃうんですけど、多分、それぐらい年長者が怖いというか、NHKの放送文化研究所のデータなんか見ても、若者の権威主義はめっちゃめっちゃ上がって、つまり、年長者とか権力者の言うことは絶対聞かなければいけないと思っ止まっているわけですよ。

だから、自分も恐らく、そういうふうに怖がられているのかと、教授様みたいな感じですかね。というところがあるので、ただ、怖がらなくていいよと幾ら言っても、それって絶対聞いてもらえないと思うんですよ。だから、ある種、間違えてもいいよと言うようにはしています。つまり、ここで間違ったことを言っても、失礼と思われるようなことを言っても、何かそれがあなたの評価に影響することはないから安心してねみたいな形で、心理的安全性をつくらうと思っているのですが、それが1つかなと思います。ただ、これは大分、原田さんの御意見も聞いてみたいなと思います。

【原田】 やっぱり、下の世代は、会社内とか組織内では、上の人に認めてもらいたいとか、そういう構造になっていま



すから、この人どんな人なのだろうか、昔から多分、下が上を考えることも、昔から多いと思うんですよね。上の人というのはやっぱりなかなか、実は自分が権限を持っていたりするので、下の人たちのことを本当に知ろうというのはなかなか昔からなかったと思う。昔のほうがもっとなかったかもしれないですね。今のほうが、若い子が、付き合いが難しくなっちゃったと、まだ聞く耳を持っている上司が増えているかもしれないですね。僕の時代、昔なんて、まず、ろくに話してくれる上司もいなくて、背中を見て学べというまだ時代だったと思うので、それよりか随分ましになったと思うのですが、とはいえ、やっぱり聞くって意外と難しいのですが、聞くしかないかなと思っていて、どうしても途中で自分がしゃべりたくなっちゃったりする人いると思うのですが、基本的にそれは若いほうが社会経験も少ないのだから話もつまらないし、自分の世代とも違いますからね。でも、とにかく話を聞く、この子、どういう考えなんだろうというのを、とにかく聞くに徹するというのは、とても、99%、若者の話なんて本当につまらないのですが、僕はそれをもう 20 年間、死ぬほどやってきますから、とにかく聞く。

もう一つが、やっぱり言語能力、当たり前ですが、中高年に比べて低いので、本人も何言っているか分からないときあるだろうし、こっちも聞いたところで、どういうことか分からない。やっぱり、それを、確認作業をしてあげることが大事。これは、こういうことだよねとか、きちんと。本人もなかなか難しいですよ、自分の心理を言語化するのは。だから、一緒にきちんと本人の思っていることを。手間ですが、昔に比べると大分ね。しっかりと、こういう考えで、このゴールだったら頑張れそうだよねとか、きちんと確

認してあげる作業が大切かなと。

それともう一つが、これは大人もそうだと思うのですが、人間は言っていることとやっていることが違うケースが大分あるので、これはこういうことを言っていたなといっても、行動を見ると違う。

僕は、例えば、クラスで友達いっぱいいて、人気者ですと若者が言っているけど、その子の家に行ってみると、友達からもらった色紙とか何もないというケースとか、マーケティング調査をしているとよくあるんです。だから、恐らく人気がないのだけど、見栄を張って、うそをついてしまった。あるいは自己分析能力がなくて、自分は人気者だと思い込んでいるイタイやつであるという可能性があるわけです。

だから、表面上すごく話を聞いていながら、信じない。行動をもってして、こいつはこういうやつなんだと確認する、この 3 点、とにかく聞く、言語化を手伝ってあげる、それから行動で確かめる、この 3 点が大事かなと僕は思います。

【富永】 それで、私もアラフォーになってきて、やっぱり若者の言うことをすごく遮りたくなるというか、これってそういうことでしょみたいな、結論を先取りしようとしてしまう自分がいるのが、すごく罪悪感があるんですよ。（原田さんの話を）聞いている間は、何考えているんですかとか、どうやったら聞けるようになりますかね、というのを伺ってみたいと思いました。

【原田】 確かにそうで、とにかく若い子って何か面白いんです。自分もそうだったと思うのですが、文章とか書かせても長いし、2行で済むのに10行ぐらいだらだら書いて、しゃべりも長かったりするんですよ。特に、僕の場合はメディアの、尺の短い、15秒でコメントお願いしますという世界で生きているので、要約をす

ごくしなければいけない世界で、より冗長に感じるというか。だからつらい、苦痛ですよ、聞いているの、長い文章。昨日お母さんと何しゃべったと、ずっと聞いているわけですよ。でも、しょうがないんですよ。違うことを考えたりしながら、大体こんな感じだなというので、とにかく聞くに徹するというのでやっています。

【富永】 聞いてあげるということが1つの、若者にとって重要ということもありますし、頭の中でほかのことを多少考えてもいいよということですよ。

【司会】 ありがとうございます。聞く力ですね。世代が違う方のお話を聞くのもやっぱり、若い人が高齢の方の話を聞くのも大変かもしれないのですが、若い人は言葉が違ったりもするので、非常に大変ですが、聞くということが大変大切だということで、ありがとうございます。

【原田】 あともう1個は、やっぱり自分の時代の話も、一方的にするのではなくて、してあげると意外に、要は若者って過去を知らないわけですよ。今これがはやっているんですよと話しても、それは俺の若いときも同じようにはやっていて、これ今だけのはやりじゃないんだよとか、自分の話を一方的にするのではなくて、やっぱりコミュニケーションなので、向こうの話のときに、自分の体験談みたいな話をしてあげながら、8・2ぐらいで話すとちょうどいいのではないかなという気がします。

【富永】 そうですね、社会運動をやっていると武勇伝を話しがちになるというのは、よく仲間とあるあるで話しているのですが、そうならない程度にコミュニケーションしたいねということですかね。

【司会】 そうですね、一方的ではなくて、共通がそこに生まれるということで、

共感がある程度持てれば、相手も聞いてくださるようになるということですね。ありがとうございます。

では、続いてのテーマに行きたいと思っています。

現在、物価の急騰などの影響で、私たちの生活を圧迫しています。若者自身の生活と社会問題がかけ離れていると感じています。

具体的な印象としまして、若者の政治離れ、組合活動離れ、社会運動離れがますます進んでいると思われませんが、どうしてでしょうか。

また、世界の若者と比べて、なぜ日本の若者は、社会的問題に関心を寄せ、行動しないのでしょうか。

こちらの御質問について、お願いいたします。原田様、よろしいでしょうか。お願いいたします。

【原田】 政治なのか社会活動なのか、いろいろ違うと思うのですが、一番すごく象徴的だと思うのが、言いたいことが2つあります。

まず1つは、やっぱり大人がきちんと若者のことを知ろうとしてないで、ミスコミュニケーションが生まれてしまっているというケースがあって、例えばSDGs、今すごくはやりですよ。テレビつけても、SDGsにTBSが取り組みますとかやっています。

なぜだか、特にリベラル系のメディアですが、朝日新聞とか毎日新聞は、若者のZ世代のSDGs意識が高いという記事をすごくいっぱい書くんです。

僕のところにも取材がいっぱい来るのですが、何を根拠に言っているのですかという、いや、この前インタビューした若者が、すごくそういう活動をしていましてと、社会運動。それ、どこの学生ですか、慶應のSFCです。慶應のSFCは、そういう活動をしている子が多い